浩題百首

へ 4
8191

へ4
8191

<2016-14>

関路早春

たのミこし関ハ名のミそ春来ても

あうとやすかへすをとゝむきゆく

此歌ハ古今清輔のこゝに

三よミて逢関の名門の事をうして

きよんにつらん一首おぼしくは

とらとなとゆる所ありての

卿比懐のことあらゆへん量六百

歳の歳経ハ様段関白家の歌あるハ

は霞位と保禄しかるをやるとたの
こしかいひまく考へきて立ちか
ま多の花をうらみもとかへ深く云
霞よりトむせひたり中納言と極官に
てまとやらんとよめり関乃花月
を関白の桃とむすび性星とせしと
いふて

湖上朝霞

わきかなあるかなきの一筆さく

ミやかゝりく立霞乃浦ゝ海
山姫のかけきぬ山海に
まとゐへとやゝ御やく
と云ことも也ぬ御とて海上に
京の名とめをひく立霞見れば八重霞
と云立霞乃浦風とも御ひとつさ
とけうし新京とれんとよめり
トするとなり

霞陽堂樹

三輪のやまをすぎし初瀬川
いふかひなく二本ある杉
古今和哥旋頭歌に
初瀬川古川のへに二本ある杉年をへて
またもあひ見む二本ある杉
此詞によりなれは年ふるしるしとせる
あれは古への世の杉の遠木とよはひ
といひつたへることを深くとゝして
験ある杉のことゝや申らん

霧中聞鶯

見えこめて遠山もあらぬを
鳴音ばかりは谷のうくひす
何の鶯とも分かず山高き処にもかすみ
ふかくてうくひすもなく音を鶯とも聞とも
聞えは谷のこゑとは聞ゆらくの声は
まさかて行旅衣のたち我かたへ来り
しうくひすのなきとゝまるところまても
かすかに見えにし何かありける霧中

といひとかよひたえしより

隣家の鶯

山かけの南せにもうく卧る程て

まうけかきつとふうくひすを

是は古今集詞書よ

梅の花みぬよせみくひすの

いとくとくとひしなる

とこのと許り高いへのなくとを

鳴は道い山賤の薗生に梅ハ可て

うたけのやうしいとなみよ高

ためこいふうけい隣家おうふすへ

こ雨やうあれたつうひと是

田家鶯

小田なる永しのれわせたるひ

見んとれをれを池するき

林家よ宿ゐのかよ小山田よ

あはれしいて鶴くたり

この河にたと秋よする敗のむら

こゝろみ色も清らかくぞしとある

野外残雪

春日野はこの下雪の消えてぞする
文
摘りくる若菜の袖ぞぬるらん
かへる野のけられてゆや日数ふ
袖かりしそてくの格くらむ
此之古しと書たるは明日に若菜
摘みてんは白妙の袖
とよかる古音袖ふりにけるらし

袖にぬるゝとはいへど以緑若菜
法らくのことし

梅薫夜風

匂ひ来る風にさそはれ梅の香よ
ふくさ夜やの母へかおりなん
是は東坡が詩に暗香一盞木瓜
見中有西湖十里星と云るを
たとへは庭の梅の花に梅さき
匂ひ来るは暗香十里あらく

とりなしにはことにむねとあるべし
山風と云字花をとりすへに詠
たし題をはなれず絶妙なり

山路梅花

又まち路とてし梅乃花
真 句のこゝろのおもはゆのかし
梅のくれなゐふき花も梅の
やまに香道とまれくれまでもと
云詞也出来よくあるくまじ山の梅

うら若の色として香もよそに
歩々山路をおほえて旅とより

水邊古柳

岸も用もならぬよそうか柳は
水もりいの末乃なれ去
邑古と云字の心と遠をはめく
みやかえ年月の梅りたる古き
柳原のゑけと古枝河の末世と
まとすりて三世の事と一首して

せうせく風骨文作しいふ紀にも住妙
八揚りくとらの糸とよりかけて
くりてとらゆる青柳のいけ
とよめる柳色ハ年々ありて春の世
またしき春とつけゝる柳みとられや

雨中待花

宮ふりやこのかしらゝおくら花
たやめいさめ／＼春雨のふる
朗詠の注ニ粮得月為花父母

洗耳亭無業君にと云える題
のあすらるより春の雨の詠みとそ
なそく花のなかなかそつろとて清神
にらく人の花やの子といさむこゝとく
すりとつつり古集で
引 だうちかの花やのいさめうてねのそ
わすりて花のときこゝそわりらく
六帖 なとてありしいさしらくのますとし
いろいろしてのつ私も乃らん

論語にて宰予昼寝子曰朽木
不可雕也とかれ親の子をいさむる
諺あり寝の心ぬる者にはあらし
野紀冨人
たまにはつらねはのまますまて遊紀の
ものかたりは手代しかへの酒人
万葉経の書にもまのものつらなりぬれ
まかせてらげくやもくしつれんのと
のとつることもするわれは魂さら海

枕頭は遠ともの久の花をむと誰て
南かに通ふ浮世をもくすまでは行て
ちるぬ相手に代ぬへのいまうへ
ひとよりの又素推法師
これはもて此へよ心にわくの清ん
爺もちく御は手代しくぬ樽ぬすし
といつれ者わの東坡ノ詩ニ巌玉露
金鶏ともいまして左女かまし成
男は令しのやうとこうり

遠望山花

見渡せはこゝに雲やかゝるらん
比かりの雲乃山の端
花の比はそれとも見えて白雲のたなひく
遠山花とや見えぬ海もなみまし遠く
春ちらんとよみ詠つらひかつるらむ
音はせて傍ちし西行法師の音に
行て花の雪かにやれにすゝ
山のはにはしらるれ春の雲

故郷夕花

里はあれて庭のよもきもみちて
たちかはる花にとはるゝ人もなし
跡はふりたる家のうへに見えし
かさしもなかりつきまらん
とふ人を待花のちりしゆふくれ
とふ夕つけの宿のあれまくれとも

暁庭落花

何事にしられぬあきかくれ
しらぬ　にまくかは仰に

苔のことし花はちりぬく。
苔ぬれのかろくと得ましも
そのかたぬくすれて絶しさ
と云こともとをらむは庭の苔は
うすき花の苔らはけしはなふや
日ゝ中日まとし添え花のされはち
まくまちはぬはけぬこぬくれ
ともさりや

河上春月

河辺のかはれて広さこれあり
うすきの光よきりすけ
識の根の華は落ちこまあり
あはれにほうしてぞ月もかすれ
是は佛成道の光きこゝの御うけとも
まりそは云はみすとまし河の邊は
其のうち苔ら書かれ列されまれ
乃門よそにはなく川すくは刻よく
云ふんとあゝ奴心やむほす

深夜帰鴈

春の夜ハ〻とふ名のりもねきに
たのむかたのゝ花やみん
一万要
逢坂の関のかよひをさへ嫗
やすらふ人もさくら
この関ととまりむかへる
やよ桜と〻んたゝし今見る秋
たのむかきくれんとつゝや

藤範随風

桜の都にはるのくらし
かへる春の名もとゝまる
桜の花をみせて桜ならな
ひけるも桜のさかりをし

橋邊歎冬

橋のかけ色にうつるやまふきの
いろやにほふ山吹の花

この哥ハむかしの書に天皇ハれ
とふ津国のまへ橋と本町ニ

けんねんのち淡路島に母を
連れ代に橋姫をまつりぬいうつし
にしき橋姫まし給ひてかかるにいのり
姫もしもかの人の言あれは是は龍神
の告さまは龍神か死人とかへ
人柱とこそいたの橋姫ましまさとい
ときしかしかの宮の告ありて給
まとてまうて人柱はすなはて
ねその跡を祀すへしよしうけ宣たら

親のおいひて男の柱まゐり給ひたと
かうらひ荒川にてことなとて地成
つま龍をこのたとこそとかたしかく
かのこのやかてこしにの也て給へよを
とへ送り給とて男迎えて神子の小け
もとか来ぬとこそつてかれらかねと
松へとしかかしか
扣の屋からとそまつりみな橋のとも
申御となりしてまへし御心

ともしめて女とハ逢ふしてからは
ぬるとありて腰のあたりにかよふのか
そくもとさし添て
いふまんにハぬるれ花のはれし
からのうらとまでくかさ
とそ口ずさみけれ花なき頃の歎きハ
おもハぬものを身にも自と取合て
よあれとつん橋のわたりまでわれ
思ひ過しとかつわかしにあなかしこ

ハおもひしにかわり

舟中暮春

寄ふ言ばらすしとおもひくにもなりぬ
春のさらひとまつわかれ
春の名暮春とふしそ
なお春しるをみさらひをたつ花ぞく
いかにぬるものかれとも朗詠暮
春の詩に送春不用動舟車と
よめるハ

卯花浪路

卯の花のさかりはたへて浪とこそよ
めて流し道のしるへもかな
是ハ惟高親王を世に小野と云所にすま
はれしの宮なりし也小野ハ雪ふかき
所にて世をすてたまひし程になられける
正月に雪ふかくて見にまかりしに雪をふみわけ
まうて親王にまみえたてまつりけるを
物かなしくおもひけるよし見ゆる也

小折て
よすまてハ暮なとはなにをおもひやらん
雪ふみわけて君をみんとハ
よみて奉りしをまた道のほとに
卯花のさかりをすきと云ひうつれハ
たちもとらぬ昔をしのひつゝも卯
花よ露のたまるハ惟高親王にむかしを思
ひいつるものかなしきことにてあるにや
杜子美か詩にも感時花濺涙恨別

鳥なるをとは朗詠集に蔦蘿
見露拈蘭径漢洞風花桂幽
あれをは付是是草生は径と読み我
やあとは云字もかんむりある草也よく
初関新云
きのふ兆家云染しはかりしき流
流にう照柳は北の古多
兵
照日と夜さ見とくらしは是はしめまし
いつしれたりと秋鳩の如く

川
弥月もろ山新しういは如きこ
今しすうれ名ね古草如古声
とよあれ西前の詞とよ撫り也けれ
日よ声すみしは霞乃教るらん
て今日あとつかひ世ゆおもひね
御は古草如古声すうあつまる落
とつこうらうふや
山家新云
この里はまらし海見すし新 云

山とひとつゆふたちすくとれ
稲もしに山とひとつ植ん所ゝ多ら
いなさきゝら雲うくれて
空行や夕人もあまる海ぬ
人もしつ日ゝ海道山とひとつ植なたら
小この里に出暮かし黒きとから

池朝菖蒲

暁ゝらあふひくわやか池こいり
けあのか見れ里てまうれく

きの里てと雨にあやしに吹ぬ萱
さやか我背乃そて待りと見えれれ
とよのれもとすこしゆかすたにすう
たにゆれもそやおやかう夕月里近き
里つゝしきあふひの蚊火ゝるとから

閑居蚊火

こうれて煙ゝたゝし時立てぬ
ゆふとこの指の色ゝるはし
時しかぬ山の菖蒲士の根つはたれて

かのこ海そしにまゐりかん
と云詞ゟ云ハ閑居ゟまとひまつハゝゟ
つる燈の立帰ゑつとてハ下とゟり
此世實るものはらしうき河の思無
もとよりらへても時ならぬ花代
太平の詞つゐひもろ庭体ゟ瑞芳
業なり

盧橘驚夢

袖の香や昔をかたりかゝる夢路かな

橘花をよるに夢の枕をは
古
風情をきこえしく書ちらしての
夢をさそひしをはるに至るの
匂ひの詞也たとへは橘の香は昔をしのふ
夢は枕にまよひぬ事ハ難題なし
といへり無名の花橘にともをとはふ
夢もしは唐土翠昭明太子と云人其
女の言に高人のゟうち
と題して詞に妃宮にかゝりし桜わか

ゝ右四へ御かとて非象金波ゝと備
なれハ金は太子御力のうつしさゝと
庭をつ梅かうはて信まとめれ
といひつくたり

杜宇月　両

古
まひ人のかねたかし杜宇月のみ
雲にそ成て杜宇の森
花衣をつて名ハよひ人のかゝ
雲のふ旧へとそつかりつ

この名とよびし杜若ハ杜宇傷よい
とその眼をいて是則はなあたりし
月ねされ名まる杜字よれ杜とい字地
ハ杜宇月成営にし称せきあとある

野夕立夏草

万
何てれ地のなりやうに常たりきまあに
見わさ流れしめに仕一きりたん
わすれのこともうぢけしかけるもに
しきかまれもそいふ猶りし

この河しかの句にはせおかすりに
身をかくの事なれはゆふ
ことはりめにも見かれくに
とよかれとしと書られし又文
秋後日てりかしたくかやの下葉の
夕涼くともらてこゝ迄合ふかたふさ
ゆうと前にて師と道しと云あ
云ことゝ有てかくとのこゝまろう律とも
すのまつさ本様の風常の河岸

洞底堂大

日就草よりてとくちれるてし
若のも乾ひとなる書れ
古 橋人も境あ云の日うけくさ
とよおある又ゆうしれるへし
古 日りりまき岩にいまきとよ角すきい
ばてとく此岩塩ひうし
とある間きく合えしかとたそのや
むかひかけ事に一流を書と

岩に落てとくちれたるよりは葉れ
遠く淵底まて音すなるもおそろしけれ
るなれ

行路夕立

夕立に神さへなりしかはゝかりて
はしり行も道さへぬれや
立よりては雨やとめまほしかりしかは
かくすみ川越てすゝしきもの桐
様ともあれうへしに旅行の

跡といふ風雨えし侍りけるよ。
嶋遠ていつとくもなる遠侍りた
れんみなかりたるきあくかあれ
ろまてしるしたる河しのをなみより
つりも雲とぬしより雨と
は古里とみえるもあとなもて色
ゝたちてかへし

初秋朝風

秋来ぬとてふかるある遣せしに

古　拾

わけの風ところ〳〵りよ
秋こそあはれにいはんかたなし
風の音にそれとなく過ゆく
春の日はつれ〳〵にや三芳野の
山もとうちすてゝ今はいつかへりなん
蓬生に寄て侘しさもまさりけるや
むかし源氏末摘花よりおもひ出ける
ひく紀友則へまうでしもせぬ
かしこたりしの跡たづねわびける

家居のさまにして伺ひ過し川を尋
ともなひたる源氏の君の初め
さくられん常陸の宮の古蹟に
末摘花の君のはかなくもすみけるとや
せめていとそ物さひしくこそ
しはし惟光なるもの侍りて
みそ道へのあさぢふをわけゆく
く象鳴松槿孤棲蘭菊も
中にしげくして言のちりはてまし

末摘花はさらにかなはぬ道しく草子
ともかゝせ我身はかゝさもておは哀
かれはまゐすと源氏ありあひて
見るてし我をもとゞめ道もかく
ふつかのよにはさしみたつと
とゞまりたゞ海山にて蓬生に
ふきをとりせさて出つしこのうやふ
ほりわたりしまもて宮ゐう
すりさものくち門ともゐるゝ下庵

のとのまそきめやまさかとしらせ。
ゆふとゝめんそうさのむかしをきてふ
まさらせとらさすから源氏の
むかしよりかはらぬとあるかなや能
吟味勘弁すへし又は寺のおく
ひうや
この猿物来まに秋や冬遊
わかたけの風のさそのふれます
四月七夕

天河又月は名のみかさなれと
雲の衣や上露にぬるらん
二三
山かくれはてゝも月ひ
雲の衣をかくすらん
この詞は七夕の歌にていへは
花あしかそ何やとつゝ重ね給
いさの衣をうたふ和歌なれ
らぬとなり

野亭夕萩

秋はまた我のへの夕露と
古
よしやきえて哉のあらん
萩の露をもしぬらんとされは我
よしやきえん秋の月なる
三つの詞にかなり野亭萩に
露とそまたさえて我身か
てきしやとなり

江辺暮萩

明されは秋の萩葉のかけのうき

月と江をわたる舟人
是ハ三宗曲稀なる哥也　蘆荻洲
裏孤舟夢　楡柳落花前望
心と朗詠雲　楓葉荻花秋意
ことに文集れとかつまれなるとさし
郷常に詠じ吟ずるなるか
ほどいつもしいこまかたと萩の
なみ月かくふたのこゑそ秋風
さこくと吹てらん江をこえわたす

舟のとまつつらかひるかへる詞
つらひ侍りて吾哥なつきたらし
山家初鴈
秋風の雲ほうきまつ乱きて
都の里やかりは声にや
深きにかきるまるに乱きと秋風
ふるのかたて雁の聲にふれ
白雲まつかるやまひすらい
ありさまをなさかげとはなくみ

さへておける山をうつすなり

海上待月

清渚待秋花とかざしとて
おもしろしいさよひの月

古
草しまは雲の墨とともに海の
波の花は秋の夕の
引
まつ海のかざしにむすぶ白波の
波まてみれば清渚なり
この夜の月は海上にて月を

まての島に上る月のおもしろきは
秋まつ花とかざしおくことなかり
とうつり

松間夜月

袖にみし花の色やとどめおく松の露に
めぐりかはる月そやどれる
松
松風乃色やとどむる浮雲の
夜の枕に人は袖のよそに露
古
あひよはひて拍手袖のぬれ衣

やよ月さしぬらしかわすれ
有明の月や包は袖ちかたといふか
袖ぬやとらつき月と云ふた今宵
松の木かけ月と吹く汐風の音や
見んとわか旅の添て月もぬれる哉
あれが家まくたらいするとめ
かやた車みつゝきらふて沈吟

海邊月

範かそていてそかまの袖かいれは

七

ちの山の月とつやと思し
ふるさと人てしまあぬらてされ
てらされたのそ秋こもやさん
この月をとわれわか袖の花のまつ月
そも難人をやさんたとひきやまり
わしまのまとひそといふり

草露月映

武蔵野まとて露やあぬ日夜の
くさいかんわつる月そこれりし

右
むかしをしのぶゆへにや志賀の
都はあれにしほまとこそ見ゆる
このことは何か思ひ出とて人々思はしを
都はいつぬしとあらそひ中なる月の
見るもそこひくは松が枝にかゝる
きとはあるやや

関路惜月

逢坂は守る人月をとゝめても
うしも月をせきとゝめそする

方
名におへも月は関にさすと
しひてもきかん関守いかし
とかむることゝもこゝはなにはのあしをと
やすらはゝ月をとゝめてもやもり
月は関におちてかゝる月とそ
はてしとよめり

鹿聲夜友

山里にゆく人の心なれや之
しか鳴秋の夜の友かな

白氏文集に君子有行阮籍也
としるせとよめる也是は竹林の
七賢は遁世して竹を愛せられし
晋の代の人也かの友なりけれは遁
世して来をくゝりし庵に遊とも
身にて手のしもやらんの友なれは
もれしといふこゝろかや

田家擣衣

露霜のおくての山田かりくれは
ひまよりすゝむ秋をしるらん

右

初句に晩田山田かりそめに
うきよの中とかこひそられ
此哥ともめつらしからぬ稲あつかり
て風雅もありそれに秋の気色
またよろすよりてかひあるかや
趣の由歌に去了はわれ稲もおなしかり
すゆへして世をまよひするもの
衣追の名のさしく稲かくれといふ

しも夜衣たち帰るよりにあらし
ひわたるひまもしられと播磨路の

古渡秋霧

夕されはことゝひ侘ぬ角田川
我とも无しありやなしやと
名にしおはゝいさことゝはん都鳥
まつはおもふ人はありやなしやと
ともに詞しらぬ雲霧たちこめて武蔵
し舟わたるもえしらんくたれ。

えしもとかくかや

秋風満野

こゝろみか下露かりてひて
さらひそすめもしの秋風
見るまゝにとゝきをとかせる
このそこれ住か面かはまれなりて
たのまぬ雲ときすてくやかさう
わか面に浦から袖ふきの下露と
なくも浦のひまめと涙の

なかむとも深くもみとりせむらむ

籬下虫

見て流る萩の籬の下露に
すゝしさまさるむしのこゑ

古
鳴すてられかりの宿るやたらん
声のねすふ君乃萩乃上の露
とにあらむ小萩か花をみるとは
いつる露のしたふむしの声すらく
みち色にけりとのなり

紅葉浮水

川
山川の岩きて紅葉々に
行あらはし色まさり流く
春ことにしのゝめく汀と都すみて
行まゐみよ袖や祖ゐりん
とは月か云ふ河の岩らうとおひ
すゝみらくてあそ晴れと
乃建や水面され本来ちも海さ
迄りしもて桜れとすれもあらう

秋ぬといふを霜見る詞と

山中紅葉

やまかくれあかき紅葉の梅えの
いろしかともこゝろまよふらん
降りしも時雨もしらぬ山とめぐり
見てもゆきさそふの梅迄みや
まて見まよ行くはり紅葉
赤き里の奥すゝ黄葉しいくらし
かゝる山こそ桜もゝろともかなり。

露底芭蕉花

秋風のうらにたゆぬ白露は
見るてひとすぢ白の花
ひとつやうのうきわれたる風
ことはふいたはさ数さへ落花と
見りてまて花とひとすと
よかり門つらひかつらふたみ
かたちいうかんてかくかゝれや

河邊菊花

大井川の七瀬の淀も花の色と
見えしもみぢ葉流れ行の末遠く
遥かにりうひつとへれ
行過ことにわきてやにしきこそ
嵐吹しるかけよみ花の色哉
いま千く梅の山そて渡江れに萬
花色しまりて神無月の風に色
山川の末にえ流し及ぶる哉
独惜暮秋

また人の世にあらしの草葉には
思そめさ秋のすゑまと
無種ならぬ花百草の位をさそ
見られし袖もや暮そてきふし
わそみならんとまりぬらんむれ
さて草は好人名残あれは此寺
情深の哀と観じけれ
侍りしもわれ有りともひか
またて立まりぬゆすらいつる

うつりましとみつる

初冬時雨

守りつゝよさ世の空の雲に
神無月とへはさて晴の
きみかへよ晴はそめや時雨としも
なかしぬいひとのこゝろすかなり
うつふるそとはまたかりつゝかれ
あれつゝ今は時雨のふるさよ
昔とともあれ花ともとすかうの心

は神無月ときりしもとふみて下
ゆくや竹の里の音羽ゆうふれ
神無月とは世よふる里ぬふとしぬ
れるやすしいふやも玉緒し

霜埋落葉

朝霜の庭の紅葉しはいは里
とめてきさゝれうけのこゝろと
是は清紀の世逸話の心とよ
かりてとふ家まてれ人ふか時雨

の最はなれつゝてなけれは至まし
れとおもわりなく去のならしのやく
して詮なきといふにはてはいふみなれはなん
世の中のみちくはしく言の人とも
て至りしは花落葉の上也因
果應報の道理とそのわけあり
よろしの季節にしたかへて云れと
よくする古人の扁よりけりこゝろあるを
うれしく存候はゞ御覧被下候すれ

いかにかの音ようしをとらへつき

屋上霜

梅の風にわれの身をとして
風も月も出ゐるもしろうき雲
行に我は音至るに云所也但上下
の句相てらぬやうなゆかれし
霜を梅の色にあらく咲くしら菊
おもひつらむとみゆる空のいり来
また風のふくたびに寄つもりける

古寺布留

ひとつやまより流の布さらす
須ゆかりける人は仙ろ神留
是ハ古寺のへとふつくりより宿
こ寄りやまりてりよあれ
たらぬとぬ義を了してはゐとの
すくて流の布さらすらん
とふる音和州龍門といふ寺よ
来り仙人そありて寺と見て お

こゝにて仰しハ此寺龍
小女の布をさらすを仙人見て也
今のむかしにたらぬ神通をさ
れまとしハ仙術もやさしそてすらん
今しこそ無この古木とさそて
古寺とよかうとしれ女の布さ
らせしハとやりきりて書れけ
とうぬるとしかり苔相逢詩てし
月は心高須宴雲お地是龍

門遊水巻とはせらしこのむすり

庭雪勝人

我門にふるむかしはよもすゝ積ぬ
雪のむかしの庭とまかせて
今日こそ人と過せし人はふり積よ
うしろの雪の花ハ雪の年しとふう
今たる庭の面の花とて見ゆるへとさ
むかしはよ待ハ雪ともむまを也
残りはねをおきとや我まち

海邊松雪

住吉は松や洲くと降雪ふ
須もまぬ遠はほ詠人
すみよしの松の雪もとし詠はしの
月かゝうれ漣漪なりゝ
とよあるむを見たつ奇し花行
吉ある雪は日のか思ふ節く
松やらしくとたとるよはまる落の
今も降つらくもし来ても御る

やとつりトもいは雲に松に桃をも云
隠逸断とあり

水郷寒蘆

芦の下に下葉まぞ　三嶋江の
入えハ月の氷しけりす
あし間ハ水も面白からむかう芦の
下葉にたれしろうと記ハ霜かれ
風さて江村の月守しまし
とよみまやさすらう引長河う總

のむかう三嶋江ハ様列かすゑれん

湖上千鳥

湖のうへや月にかうるよむとあり
これ生乃湖とさして湖なん
ハ遠の湖とハ仲生湖沖湖并湖
田とはまくわれ也むハ海高也小さ
都て月と待れかハ海中ならく
沖ハ湖より三湖也とも也ハ流く
乃湖とさして鳴らんとよめるなや

寒夜水鳥

おもひかす枕と風のおとさへや
鴨のうはねの霜はさえけり
水鳥といふ題すてゝ下の句に鴨ふ
かしこきにや意ありて宜しき
小鴨も侍らはとかくよかるへし
枕の霜といふも侍る也
殊にかゝりよろしく霜のかさなれる
ともかくも鴨のうはねの中に霜。

侍のね寝と云事幾は重なる。
よはわろかるへかり

歳暮澗氷

今いくか春にならはの初鶯
左 のこれらおもふ下にはわかん
山風もこほる氷のひまとして
右 わかるゝや春の初鶯
云々行ら音をきゝて守らは今
いくか春とやしらし春まて氷も

下とけハ井おくれ江の池紀宗祇
ゆとも世もへしもあらかやとり
なきみえし雅遊しもいとやすき 堂
秋おりのこゝろせうての有るもや
稲鶏風恋
思ひおかうるを里人ことゝはん
おれし居色の松にたれやと
花みちちり尚てぬ着かさ
ことなるといふ谷路の色なり 三郎

ありせる子なんよ保男地おらん
とゐまうする小保をえてそのくす
ありいのことをまん路の徑くよ真
古 中あ晩しかたさ居遊の松伝しみ
河しもぬかひをうかれ
とよあつる何とともりんいふ神てかか
深きを求てもらつと深とう酒さ
むとかかやの超然まるまり
塔様わすれの吾みら所見ん

ふりけんや

聞聲悟道

秋の夜よ松ふくかぜの音ばかり
もむすびし夢もさめてハ
夜は松ふく節と聞なるぞ心の
我おもふ声のこゑとしてこそあらん
悟りてきくと云ことたん哉
たゞきけすまりかくて今はた
や秋とて露もれの拙は虫乃

ことぐるゆハ音に穂かりたるこそよ
からみやされハ小艶と云女なりの名の心
とゞかぬ呼小玉か無事唯
要謂得檀那恵しく一吟
味ふくみかや

思親眼恩

めでたくに花ていひてしは宗乃
色ごとの人乃章ヨめりかし
此ことの色ちんとこひめしたる事

野するを寒をまちれなるべく
このむすけ帳と縁の別れ難昭
みとめ何りゐかせいゆるかへ含れ
いかにる言葉にかへしいつとも
かはらぬといへるうちとけ昭の
ことなり

祈不逢恋

ゆきこそわ風さそふらめ操
かれかのいは錦まではて

けぬ
、いせしとは宇治川のせしは枕
神にはすしかはのなかれ
とかめつ事とも人言まし
不逢てきる錦まりて百
しにはすで君かたと
ともに合てつりかへ乞ふ
むつかひ世のなかつれを恋
せしとかは枕にもこれ祈
てわかね逢の心なり

旅宿逢恋

難波江の芦の葉のかりねの枕
をきつすみわたしける廬にて
これは古和ゆへてよ難波江
乃旅をかりとしてとるに新枕
せてりは一日二首て難波のよ
泊りの男にとりや寄てうみ
女と契りより女の名をもつよ
すへかりし遊女を遊女の男

たらえてゆへ帯をとかて夜
あさのまにかりはてなく
ともかれぬる女の
高瀬川名所にていはれ川の
りぬしろぬまりてやすく
ともかくてやそれにかへる
この面着よもとにかまし
勝者を逢とてまにかる
命の道の枕にしてす露

のとく浪墨倫せんつけすとよ
めぐみや

兼胤院恵

今宵たにまつ梅の山ま籠らか
わらわきえぬ首やさぬと
光源氏初代蔵つい安御り
わいゆしとの言葉よろて
梅の山まやりしそう由お申を
話とおやめくおもへすに東い申。

くぬことをれかどのそくろぬ姑め
うやきの修すいま蒼みなとかへ
あそ女郎
乃ちへしまあやて撫男て蒼ぬらよ
やうれもゆきて我ともぬれ
まんしえて
世かるりにしくやしさつんかひとまよ
うもて男へと言ぬ首にまして
せ西首とともりすをゆか蔵て

暁とハいふ事の心すゑハ暁
しも置ては首をとゝかえん
起りしよりかくいふや
帰無書意
我宿ハさましけり袖ぬれつゝあれ
首ハこふしけくかつくへしや
是ハ世の孫に書年まわひ
故にてその後たへ書年紙面
隣ハ我人をあらそふしあ

ぬめハれきさことゝかしすて
君やこし我や行せんおもハ
首ハこうしむくてうきあるてう
業平の哥也
うれしく深き心の母にしまとひき
首ハこれにとひとにしまひさめよ
とヽあれ哥前とよりんむハ子
古今集に我家のなさく續て
とわれ何をとふ逢ハかれ袖とう

まひそくをいはんとおもふへし
すこしあり祢ひやかりし
こゝりそは若ともし泛くとも
かさゝと云ふすや花やかなり
いきはしとよくいはさうる也

遇不逢恋

古 よ何へつはすふかりくよ屋や
やしのうつゝの人をなほかけ
うちとけ我身のうちはかなくしなの

ゆめよりそうもみえてあり。
と有言葉も心にあひ叶ひて能
下にうけていたゝけ
前の者はたへていはまほしの
うたのうへのかなはねとかり

聞声恋

新古 袖ひてうつ我身のそいくそう
しのふるまの声の下にかん
袖ひけていひしかはらもわすれよ

このてらはあえましそこをまた
とひ詞ありとは秋はけて聖し
おもひてこのたきゝうりぬとしうふ
ア(?)なてわき紀聖小て挑
き中あ春とかくしと宣
たしかまき書の色よ勅てそ
き秋このしとふかし

疑真偽戀

たゝもとも世のいたりぬらん

古

くものまよひあへき筆よ照られ
一流ありと思ふにいつまでは
稀までとも我をなきまし
とかふ詞をかすも書のみか陰
偽るにゆくてともてこの
まだつきすれは句にあて
ておれいまのてうつうしとよ
ゆるかや

返事増戀

かくしはなれなくやはらかくしぬ　如
ろうとうくあそびけらん
夕雲を過たるくし且給て
かの里我もとこそのまゝあてらん
折ふし嬉しくのまゝに遊ふ
何事のなさけも男たゞ一つ紙て
是は源氏をのがるゝよしにてたる
至らぬことゝは光源氏の原母こと
とゝしと相中書有清のおほ

神々よりも給へてあるをも
てうのあゐ思ひ申つゝきすに
かうりとうりとて紛河の有川
ことくさく文をとふ子とてに源氏は
源つゝむられかのことわりて
女の事父をとゝしへましかくれなり
かくて相手源氏の流てもやこ
あはれのとかし
ひとつ云事紫とすんぬとも

おもふわすりと云やうれ給し
と云と見人あひてこと多また
わりしてせ三ヶ条ぶに入て
云傳て酒や云様うに作と
思ひこうろゝありてへ
とよめる一首あひとまるに絶
するまでかはりて脂膚も
て果あひもくはやうよりもにて
家云あやし

〃稀也て見ゆる世と人のなり
いくたびの事にこそとん

被厭賤恋

ちよいてつゝゐるもの世橋の
ありつ作る表たてゝと
源氏ゆてりまつ都あたる雲
かのかりといふものことさきん
と思ひかされは女しま十つ多
とあかし女有まじなげき

夕霧の御息所に従宮世かくれ
ことゝやまるれ給ふ君
御のすゝしかりし御の色へと
わさかんとりとやいはるへき
ともかれ色はやまもあ根服消
御ほ色うさしい庭の御ふへり
そてはかはとといつりこのゆとと
手てもにいあしいは年か
世とよ百ゆるゝ人死の書り

逢別のこゝろを明らかにして。
あはれなるといへるにつきてさ
と云詞や我様のあはれいへん
たのまぬ庭ともかゝるや

途中逢戀

手にいへつし
道路逢の井より常川在山
大和物語の大　河の御
常よ門舎人みつ　勅使よ

寄辺へとはゝるよかんのなかり
あて十幾かの女をねひわ
ゆくとみてらしと侍りきへとい
この女といふ我家のうせんとて我
下弟ととひて女子さも女弟
とりて合人して死てのちこの女
十五六年の時そ召使はせ
られし女のうしろて
山陰の井とゝむ氷なれ給ひ

たのみしかひのありしよと
とよのむねにて涙氷よみ
とうはさうらいける此也とあれら
下のはいうすれはつゝしまれた
あとしられしや露という涙やまを
き命をつくりけり
帰り帰郷
ないふ道かしこにのこされ
ことてうつらして露の春

六帖

うき里は秋のはてのあはれハ
すこし猶りのみたゆる(?)御
此言葉ハ也ハ津の国の歌ニ
鶴とてかへらしにならずば露
乃数ほにハいつはりて記るのか
と思ひあはりてし数かりしと云也
忘住而恋
いふせんなめ里し住の乃
岸よりみてふ草にほひて

七

通ひしもたにゆくゆきかへ住吉の
浦よりせてふ恋ときも浮
といふ云葉も也ハ住吉とかし
尾しかかしてくかのうみ岸の
ことくくとはいしてつれくしき
さうとかいふせんとかり
依意祈恋
すうくやおもかけつよとも守
とものといのちもかりてお岸かさ

七夕はかしらゐあおくして
そのとまりくしやうくん
とかれ古今わかうかは今かわり
遙せよとまんさつかりくして
月久人とのかたらのしやせんか
名ぬしてく家よきゆ

備前路戀

もとひ海やさく浦くよき川の
みゆるくまき中乃うよひら

月かれめきし入ぬかは磯のまかるまや
月のてきるまきこふくぬ沖
とふ言葉とやたとへいらし
と備てへとおもへかりつ年の
もくすきこ中老といつりれまき
むすかるすあ立緑乃ま家と我
いふへしらさく

備人名戀

かりうかみおもぬつのかれよすのしらん

信之示

袖のとしほぬらすりと
一セのうきこす紀すさぶ海ならし
みのりくく揃む貝や拾む拾む
とふ袖し知いあらまとうのくらん
いん我こよ思ひの煙乃立
とふ家とい云御中とあり

絶不知意

あつひ草への分すしうとつりや
名とにはうけてあらまほし

源氏日頃とけふ女房琵琶乃
上手宮道にうとて源氏つ
世話ひしうか紀絶えするもな
よりしにしつめ仰りうれば琵琶の秘
のと紀源氏の車へ下りて見ゝて
せんう
ちうありて人のかさうし紫のひめ
袖の様うしおうへときわる
比むとよかり神のゆうくてはつひ

夏山とてかゝる北のかうしとのみて
後ても猿は我たかひおつれし
すしとかり

一生恨絶恋

こゝろの筆の塩とも今は絶ぬ
里の玉のうへのこゝろやすへき
古
我中の行里乃玉にかゝるかに
うらみとのさへのうつゝん
この世は里の玉へとは海に寄

浦も我行宿へはつとてあ
汐みちのさとのひろき有事くれ
まなこゝかはれしせきかな
て里の玉の下海辺てうらん
と渡るもたらしひまするねの
たとへみそうこゝろし

暁更寝覚

ゆきもねるの夜半くる寝覚に
聞あかれきゝくの声と

されハ君をたゝふる遊楽の宴あれ
まつおいの往の松もかはらぬ
うつしとかりの翁さびをしさ
ときはかはらしとかくてそ朗詠云
鶏既啼忠臣待旦鶯未出遺
賢在谷論語云事君能致其
身友交能竭其力かやうなれは
和漢のふるき例と思ふめでたき
いよいよかはらぬめでたさや

かゝりける所に其名こそあれ
薄暮松風
植といふ歌の心ハ峰の松
ゆふへの風の吹そよくさま
是ハ文集ニ松風入襯帷云
にとよめる歌に松のひゝきをいふ今
のきをとをもあはせ詠て
流くそのくさまんと植
哥のゆふへのすゝき也

さとのとうゆへさうこうかれし
風ゆきにみすきとふかや
西律行
色うべねまる楽のみ弁が縁了よ
まへとしほ海の河のあまよのすゝ
月を戴る海とあり洞也公ハ唐よ
むかし舜王とて賢聖が
御君わりしすちの君崩御
ありれひしと蒲海と云亦す

て華屋しすりし附娥皇
女英とかこ人の后舜すみし
う娥をかるまひかなしみ洞のほと
り行と深くまてかりうみ
私とさかれたとへハ両中の竹
とこれしのまとしもへと気分
ま葉と染しかふあれかし
よかり
波流蒼

よやせ川岩きりはのうへかへつよ
若のりんしりめさえ清まさき
若は红わたくうやき桃花はは
りれさりて白かつれは茶丹て
色をとふて露さま若乃はの
わきことといたすくしな
くりんて伽色は若み乃との色
抱きけるやとかあら

高山待月

いえのやま花の風つゝつよか
秋さよくさ月れもつれ
加乃山は震旦は西明の洞をとう
をせりうれは西明山は西方み子
里ち朝ちゆ道はつうりて留
こ雨みて月をまれは清く
乃ゆとうつうや

山中流水

雲かふ花なりのふゆちしま道て

音のみ瀧のおとすも
是は稽別布川の瀧と濃り
所ともの名にして興の名に
下にあらわし都より山乃
中より落る瀧の里也と行
のききまつらんて音のみを
都にてききいさらうて見なれ
妙にの心のそれとくこひゆや
河水流清

秋の川清瀧川の名を見る
下の紫ふうす景つらに
山陰のききまつ紅葉にわ須
蓬莱は弱水とゐふとよ
かわ子流つは蓬莱方丈瀛
州とて三嶋は何して仙人の
往来のはし嶋の海りは文首
里のわたて海の如く岸に浮
以す清水の流り見へと清瀧と

よせてかへし
春秋鶴雲
和歌の浦に寄せて行かね
この月の小松生ひ出し
和歌の浦の葦辺やさして蘭
わりなきとよみにけるとかや
此云異し名に昭也
関路行客
行人のかよひもしけくしてゆきかふ袖を

ふきかへる関の山風
家法詩に勧君更尽一盃
酒西出陽関無故人といふ詩
よりてあかりある名は
旅程とてゆきゝの詩と伝へて云
たとへは酒とすゝむる人の色
よ勧盃と関の名也とこそ申
よめるも此関の名を取りて読
ゆかんと是腸に故人はなしと

しからかや

山家夕風

暮行ハ尾上の葉音に心せよ
おのまさへかりしもの袖のとき
山もとかふ戸の葉音をかへると
よもすからもやはり袖の上に
此ハ明けて朱とむしかし嵐
おのれうちすきてわれて
かるまつかくしかり山家雪

山家人稀

古へとふの人や尋ねせん
よもやまとあらし苔のうへけり
踏わけて訪林に苔むして
折くるまさいの尾くほ雲わけ
とおしへる人のなきそつく
帰りとむかへれ

海路眺望

おちかへは中に舟かちから

よひゆく小侍従のこゝろのみと
待よひにふけゆく鐘の声きけは
名しくのりぬ君よりいさて
この句は仏御前の上にて小侍従の
ことはと評せしはかりしよ
ゆかり侍従とも知れぬ花あるに
出る月も出すれぬや
月 籌 付友
冬月鏡有けり我めし庭か中る

いく有明の月と見るらん
冬月鏡のにこり我かよふらん
明の東夜よ月やらんとあるら
ちよ猿けも吉野の花を見まし
下のもつれかしく鉦
春さよや
藤着衣雨
ひしかくや恋の袖の露
袖ゆく玉て筆しもとすす

白居易云故郷有母秋風涙
旅館無人暮雨魂の心も
たひのやとりのうきねかさね衣
のかはきつゆらひ玉このまぬ
くるゝ日かすもかくれなき
まちわひしうしもねひらきや
海邊朧雲
須磨の浦にて泊さかく古寺に如
月のまはつまを聞くそれよこそ

須磨やあかしの月なき夜に
雲のけしきもくもりて
空すみてひと声を音もよ
明くもしれ星はゆきかれ
入て楼の雲もさすくまもなく
れとかゝり
寒夜無常
須磨の浦わにやつるゝ旅寝の
もかつくよとて蘆の根つ

行ゑまゐらせよとぞおぼしめされける
いやさかの御子もおはしまさず
ともかくも詞にのべ唯識論にし
生死流転皆夢長夜この
みのむかしたとへはこゝのよつはな
果は酒とゝもてさらさきを
柏つやかくさめぬ花
世のひくつきまことなれは
こそほころの事すれかな

芳草遠懐

ひさしくなりしかはわつかし
ことゐかたの中の橋ゑい
都をせい百官の事も内裏
に闕官にして多くのわたる人
みな勅勘の人なりし官位とて
遠慮とゞまりかなはしと思ひし
とられしと成りしや東のゆよ
左月のくわしきかうれしや

寄進像
九重のうちの櫻もまさりけるよ
三千とせにいたらてすぐるとも
是への御子ならば給はらむと
かくれたとの給ふ御歌なん
てあるかなふにはきかたり
此卿七十二歳にてとしのゆ
ゆかまてうとうしたれん
とまかときのうち十六歳なり

是にして三千年はなにかあるは
天都にいたりぬ思ひあかぬまで
たちぬる桜よりものつけ
きこえめて標ひらりたり
すりとかり

逢月懐旧
天の戸のわくる月毎 寺の念
夫ともせしれたらぬあの
曽祖父また元文卿なりと云

かくれしまと明日といふ世の
ひとてもいりんそ書てぬしり
こゝまでれうと立かつてぬとつかふよ
末春行の世の哀れなりぬ
乃根ロ中りくきこしゆりや

社頭祝言

いのれとの神しさ　世に好みのめ
こよみわたりふたみくとい
是は六年のとき頌如書写まてと

古今序にて世とかけて神よ
代々とに三神には百と百代
ありんとの相まゝは君しの御代
かしし浮かはといのちは祥
しさに地伯文せめといふゆ

以下
9丁
白紙

寛文貮年寅ノ十月廿八日